



人造少女

とんとんとん

いつも通りの地下室へ階段を下っていた筈が  
そこにはヒトの影がありました。

黒髪の流れる

女の子に見えました。

滑車のついた椅子と

首輪と足枷

誰かに捕まっている気がして

捕まえられた気がして

近づいてみました。

鎖を解いてみたらどうなるだろう？



足音が近づいて  
知らない形をしていたから  
男の子だと思いました。  
男の子に見えたそれは  
私の首輪を外しました。  
私は声を与られていないので  
何も発する事は出来ません。  
飼い主様に着けてもらった首輪と  
私が暴走しないようにしっかりと留めて下さっていた  
足枷を外しました。

ぼく

---

虚ろな目をしているけれど  
僕の姿は見えるのか気になりました。  
動こうとしないけれど  
歩けるのか、気になりました。  
流れる黒髪と流れる虚ろな目と  
周りに置いてある処置道具  
この子はきっと悪い人に捕まえられてる  
そう思いました。  
手を差し伸べてみました。

わたし

---

鎖が外れました。  
お椅子から離れました。  
ずるりと  
こちらへ来いと  
首輪を引っ張られました。  
引き摺るように  
私は感情を与えられていないので  
寂しいと思いました。  
なので、ほんの僅かですが  
笑顔を造りました。





彼女は笑ってくれました。

やっぱりここは悪い人の部屋なんだと思いました。

悪い人に捕まえられたんだと思いました。

こっちへおいで

僕が連れ出してあげる。

ゆっくり ゆっくり

彼女は動き出しました。



寂しいと思いました。

長い時間、お椅子に座る事が出来ていたのに  
首輪を引っ張る力がどんどん強くなっていきます。  
引き摺る力がどんどん強くなっていきます。  
長い時間、飾っておいて下さっていたのに  
どうやらお別れの様です。

わたし

---

私は脚を切り落とす事にしました。

行きたくありません。

ここから離れたくありません。

私は危険なものです。

歩き出すことは出来ません。

ぼく

---

上手く歩けないようです。

彼女を抱きかかえるには

僕には腕が足りません。

足掻くことは果たして美しい事なのでしょうか

籠の方が良いのでしょうか

檻の方が、良いのでしょうか。

そして逃す方が

良いのでしょうか。

ぼく

---

綺麗だと思いました。

長い黒髪が綺麗だと

ゆるりと揺蕩うように

首を絞めるように絡んで

輪郭を撫でてみると

優しい冷たさでした。

それでも、上手く抱きしめる事が出来ませんでした。

わたし

---

発情した蛇のよう。

ぐちゃぐちゃに絡み最後は呑み込む

神話のウロボロスのよう。

私は帰りたいかった。

それでも、何も発する事は出来ません。

少し拒絶してしまえば

壊れてしまうから

窒息する抱擁をして

いっそもう一度 拘束して

引き摺られる方がいいと

そう思いました。

電磁波の翼では

飛ぶことは、所詮出来ません。

にんぎょうになりたかった。

なぜ哀しい事というものは与えられていたのか

なぜ、寂しいというものは与えられていたのか。

もう思い出せません。

うごいて、私の脳髓。

にんぎょうには心が無い。

所有者は次々と変わる。

簡単に棄てる

簡単に棄てられるんです。

貴方たちの生きるペースが

早いとでも言いたいのでしょうか。

終りにしましょう。

## 人造少女

<http://p.booklog.jp/book/117996>

著者：黒耀

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kokuyou-akr/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/117996>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト